

緑のふるさと協力隊は、一生の貴重な経験

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

コロナ禍が始まる前のことですからもう3年も前のことになるのですが、特定非営利活動法人・地球緑化センターが実施している「緑のふるさと協力隊」の中間報告会に参加したことがあります。東京代々木の青少年オリンピック研修センターで行われていました。中間報告会は、地球緑化センターが募集して市町村に送り込まれている青年たちが、1年間という滞在期間の中間的な時期に、活動状況を報告し合うとともに、連携を深め合うという趣旨のものです。4月からの滞在が始まって約半年過ぎたところでしたが、各隊員はそれぞれに悩みや不安を抱えながらも、地域ごとに異なった特色を発見して派遣先地域の自慢を披露しているところが印象的でした。

日本は南北に長い地形で熱帯から亜寒帯まで広がり、また四季折々の変化やそれに伴う伝統行事があります。それが実に多彩であり、半年近く滞在しているとさすがに良いところに目をつけているなと感心することしきりでした。

例えば昼食のときに私は3人の隊員と会話したのですが、それぞれ派遣先の地域で見つけたものについて、こんな風に語っていました。

- ・マタギはかつて集落があったそうだが、今はばらばらの地域で暮らしている。狩猟と農業で暮らしてきた人達であり、マタギの言葉は今も使う。昔は女人禁制だったが、女子でマタギのグループに入った人もいる。2代前の協力隊員は猟をやっていて定住し、マタギのグループに入れてもらった。命がけで猟をやってるので、観光化はしてほしくない。
- ・高山植物は、6月から7月半ばの1か月半の間しか花が咲かない。高山植物を再生して、植物園で栽培している。ニッコウキスゲで一面に黄色の花畑がある。他には白やピンクなどの花畑もある。家には雪下ろしするための梯子が、横の壁の方に立てかけてある。
- ・田んぼアートするとき、木の杭を打つ作業が重労働だった。6月から7月頃が見頃だ。黄色・茶色・黒色・紫色の苗を植えて、茎や葉の色で絵を描く。すべて稲の本来の色であり、着色したものはない。
- ・ちょうど果実などが熟れて、農家の人「明日収穫しようかな」と思っていると、猿が奪っていく。カボチャを取るときは、猿は両手で抱えて持っていく。

私は知らないことばかりだったので、大変新鮮に話を伺いました。農山村に1月滞在するだけでも、普通の人には滅多にできない経験です。緑のふるさと協力隊のメンバーは、1年間もの間その地域に滞在するのですから、その地域や農山村について専門家になることは間違いありません。

将来その地域に移住してもらえようであればこんな嬉しいことはないのですが、隊員は皆若いのですから、様々な可能性に挑戦してみることでしょう。しかしそのプロセスにおいても、あるいはもっと将来にわたっても、この1年間に地域で得た知識や経験は、彼らの原体験として必ず役に立つことだろうと思いました。